

原著論文

大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族の 発災直後から現在までの経験

Long-Term Experience of Families Living with Victims of a large-scale Traffic accident

野 島 真 美 (Mami Nojima)*

要 約

本研究の目的は、大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族の発災直後から現在までの経験を明らかにし、負傷者の家族へのケアや支援体制の構築について示唆を得ることである。JR福知山線脱線事故の負傷者と共に生活していた家族員6名に半構成的面接を行い、質的記述的に分析した。結果、大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族の経験として、【状況が分からないなかでも、生きている・帰ってくると信じ対応する】、【自分達の生活にも配慮しながら、家族が一丸となって危機を乗り越えようとする】、【事故の記憶から距離を置くことで自分や家族を守る】、【負傷者の身に起きた出来事を家族の出来事として共有する】、【同じ境遇の仲間との関わりの中で共通点を探し、立ち上がるきっかけを掴む】、【家族会に参加し社会への活動として広げる】、【ストレスを抱えながら加害者企業との交渉や家族会の活動を行う】、【社会に戻れるように後押しして共に歩む】、【事故を人生の節目だと前向きに捉える】、【生き残った者・家族としての思いと使命を受け止め、生かされているということに感謝して生きていく】、【危機を乗り越えることで自分自身が成長し、家族も成長と再構築を繰り返し再出発する】の11のテーマが明らかとなった。これらのテーマから、災害看護実践への示唆として、「事故後の家族のプロセスと心身の準備性に即したケア」と「家族が孤立しないための支援」を得た。

Abstract

The purpose of this study was to clarify the long-term experiences of families living with victims of large-scale traffic accidents and make suggestions regarding guidelines for victims and family care and support system. Semi-structured interviews were conducted with 6 family members who were living and interacting with victims of JR Fukuchiyama Line Derailing accident in 2005. Families' stories were analyzed using qualitative descriptive method.

As results, there were 11 themes of the "Long-Term Experience of Families Living with Victims of a large-scale Traffic accident" as follows: "Believing that family member is alive and Taking stress coping measures", "Protect the family and treasuring daily life (families try to overcome the crisis together)", "Protecting oneself and family members from stress by keeping a distance from the memory of the accident", "A tragic events occurring in one member is a family event", "Looking for empathy from peer group members having same experience, and Grab the chance to reintegrate the society", "participate in a self-help group and extending it to the society", "Families negotiate with perpetrators and participate in self-help group activities", "Supporting and encouraging the family member to reintegrate the society", "Thinking positively about the accident as a 'milestone (turning point)' of life", "Being Grateful to be a 'alive' and living purposely", and "Improving oneself by overcoming the crisis and promoting family growth and reconstruction". Findings from this study suggest that nurses should keep a proper distance with families of a large scale accident survivors, and the necessity to establish the support system in order to provide assistance to families in need and facilitate social reintegration of accident survivors and their families.

キーワード：大規模交通事故 家族 経験 ケア

*高知県立大学大学院 看護学研究科共同災害看護学専攻

I. 緒 言

近年、交通網の発達に伴い容易に様々な地域へのアクセスが可能になり、多くの人々は日常的に交通機関を利用し生活できるようになった。しかし一方で、安全と思われていた交通機関が関連した事故も多く発生し、2015年では、航空事故（27件）、鉄道事故（13件）、船舶事故（788件）が報告されている（運輸安全委員会、2015）。大規模交通災害の社会的影響に関して内海（2008）は、「鉄道や航空機は、他の旅客運送手段に比べ、大量輸送が可能である。このため、交通災害が発生すると、多数の死傷者を出す惨事となりかねない」と述べている。実際に、日本航空123便墜落事故では死者520人、負傷者4人（国土交通省、2011）、中華航空140便墜落事故では死者264人、負傷者7人（安藤、2010）、J R 福知山線脱線事故では死者107人、負傷者555人（J R 福知山線脱線事故被害者有志、2007）と多数の死亡者・負傷者が発生している。また、交通災害の特殊性として「大規模交通災害では、同時に多数の死傷者が出るにも関わらず、生存者や遺族は災害後に各々の居住地へと離散するため、継続的な健康状況の調査やその結果に基づく支援が困難である」（前田、2006）と指摘している。このように、公共交通機関が関連した事故では、多くの死亡者・負傷者が発生するが、事故後の継続支援については難しい現状が明らかとなった。

このような現状の中で、国土交通省は公共交通事故被害者支援室の設置や公共交通事業者による被害者等支援計画作成ガイドライン（国土交通省、2013）の策定を行い被害者等への支援の確保を行っているが、支援体制や方法については未だ十分とは言えない。また、負傷者や遺族に関する研究は発表されているが、負傷者の家族に関する研究は少ない。しかし、負傷者の家族は、事故後も後遺症ややりきれない思いを抱き、日常生活を過ごしている現状がある。以上のことから、災害看護としても事故の負傷者だけでなく家族を含めたケアや支援体制を構築していく必要があると考える。

II. 研究目的

大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族へのケアや支援体制の構築について示唆を得るため、家族の事故直後から現在までの経験を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2. 研究協力者

本研究では大規模交通事故としてJ R 福知山線脱線事故に焦点を当て、事故当時に負傷者と共に生活をしてきた家族員を対象とした。協力者の選定に関しては、家族の会の代表者に研究の主旨や倫理的配慮について口頭と書面で説明し、研究協力を依頼した。その後、代表者から紹介を受け研究者が対象候補者に直接、研究の主旨や倫理的配慮について口頭と書面で説明し、研究参加の同意を得られた方を対象者とした。

3. 研究枠組み

事故直後からの家族の長期的な経験を理解する上で、時間軸のプロセスが重要であると考えた。そこで、石原（2008）により修正されたヒルの「ローラーコースターモデル修正版」に、大規模交通事故の遺族および負傷者の家族の体験に関する手記から得られた重要な考え方を当てはめ、危機的状況にある家族のプロセスの枠組みを作成した。

4. データ収集方法

研究枠組みをもとに作成したインタビューガイドを用いて半構成的面接を行った。その際、協力者が事故直後からの家族としての経験を想起し易いよう配慮し、時間軸を3つの段階（Ⅰ：衝撃の時期（事故直後～退院まで）Ⅱ：回復の時期（退院後～現在）Ⅲ：再組織化の時期（現在））に区切り、各々の段階における家族の思い、対処方法、生活、支援の状況を軸にインタビューを行った。さらに、語りの中では家族の一員の経験として語られているのか、または家

族全体の経験として語られているのかを確認しながらインタビューを進めた。尚、面接時間は平均160分で、面接内容は事前に同意を得て、ICレコーダーに録音およびメモを行った。データ収集期間は平成28年9月～平成28年11月である。

5. データ分析方法

逐語録を作成し、逐語録より時系列・話題の共通性をもとに語りを整理し、各ケースの理解を深めた後、家族の経験や思いを表している箇所や印象的な場面をケース毎に文脈に沿って抽出しコード化した。そして、各ケースを比較分析しながら、類似した意味や見方を持つコードをカテゴリー分類しサブテーマ・メインテーマを作成した。全過程を通して、災害看護学および家族看護学の専門家の助言を受けた。

6. 倫理的配慮

本研究は高知県立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。研究協力者に対して、研究の目的と方法、研究協力の自由意思の尊重、研究協力により受ける利益・不利益、看護上の貢献、研究結果の公表について文書及び口頭にて説明し、同意書への署名をもって研究参加の意思を確認した。尚、面接時間が長時間となる場合には、適宜、休憩を取りながら協力者の許可を確認し面接を継続した。

IV. 結 果

1. 協力者の背景

協力者は全て負傷者の家族とし、母親3名、父親2名、夫1名の計6名であった。(表1)

表1 研究協力者の概要

研究協力者	負傷者との属性	負傷者
A	父親	息子
B	父親	娘
C	母親	娘
D	母親	娘
E	母親	娘
F	夫	妻

2. 大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族の経験

大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族の経験として、11のメインテーマ、42のサブテーマが抽出された(表2)。以下、メインテーマは【】、サブテーマは<>、協力者の語りは「」で示す。

1) 状況が分からないなかでも、生きている・帰ってくると信じ対応する

【状況が分からないなかでも、生きている・帰ってくると信じ対応する】とは、家族は事故の知らせを受け負傷者の安否が確認できないなかでも、生きている必ず帰ってくると信じ、祈りながら家族を探し続けるという経験であり、4つのサブテーマを含んでいた。

case Cは、職場で事故のことを知り「神様どうか命だけはお助けください」と必死に祈り、娘を探し続け遺体安置所にも足を運んだ。「遺体安置所に着いた時には、ヘリコプターがパタパタと鳴ってたから、ひょっとしてあれに乗ってたりしてとか。でも、死んではない。もの凄い重体かも知れないが、娘は死なないと思う。というのが凄く感じましたね。」と語り、危機的状況に陥った時でも立ち止まるのではなく、<周囲のサポートをかりて必死に探し続け(る)>、<生きているという希望を抱き信じて祈り続け(る)>た。また、case Eでは、友人の連絡で事故のことを知り、その日の娘の行動を確認するため娘の部屋に入った。「部屋に入ったら色々なものが置いてあるわけ。もうその時に、真っ黒な闇のようなものが私に覆いかぶさりそうになるけど、グワーっとそういう思いを、重たい扉をグワーっとどけるみたいに。私の中にその真っ黒なものは入らないでみたいな。」と語り、<不安に押しつぶされそうになっても覚悟を決めて家族の帰りを信じて待(つ)>ち続けた。

2) 自分達の生活にも配慮しながら、家族が一丸となって危機を乗り越えようとする

【自分達の生活にも配慮しながら、家族が一丸となって危機を乗り越えようとする】とは、家族の一員が事故に遭遇したことで家族全体にも危機が生じるが、家族員は各々の生活や役割を調整し一致団結し互いを気遣いながら、自分たちの生活も維持し家族で危機を乗り越えよう

表2 大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族の経験

テーマ	サブテーマ
状況が分からないなかでも、生きている・帰ってくると信じ対応する	逃げ場のない恐怖と不安が襲いパニックになる
	周囲のサポートをかりて必死に探し続ける
	不安に押しつぶされそうになっても覚悟を決めて家族の帰りを信じて待つ
	生きているという希望を抱き信じて祈り続ける
自分達の生活にも配慮しながら、家族が一丸となって機器を乗り越えようとする	負傷者を含めた家族を支え守ると決心する
	生きている徴候を受け止め、生きる希望に変えて生きていく
	負傷者を含めた家族のためにできる限りのことを行い、自分たちの日々の生活を大事にする
	負傷者を守りながら生活する
事故の記憶から距離を置くことで自分や家族を守る	自分を守る方法を選択する
	話がしたいと思うまで待つ
負傷者の身に起きた出来事を家族の出来事として共有する	逃げられない痛みに葛藤し、家族として向き合う
	負傷者の身に起きた出来事を共有する
同じ境遇の仲間との関わりの中で共通点を探し、立ち上がるきっかけを掴む	同じ境遇の人に心を許し、感情のキャッチボールを行う
	同じ状況の人の経験から、自己の経験の共通点を探す
	巡り合いと出会いに感謝する
家族会に参加し社会への活動として広げる	情報が支えとなる
	沢山の情報の中から自分にとっての答えを探す
	社会資源を活用し、社会と繋がっていく
	先のことを予測して行動する
ストレスを抱えながら加害者企業との交渉や家族会の活動を行う	ストレスを抱えて生活する
	誰にも相談や頼ることもできず孤独を感じ、押しつぶされそうになる
	個々の家族員も二次被害を受ける
	家族員に理解してもらえたことで孤独から解放される
	家族員や周囲に理解してもらえない辛さ
	お金を手にしたことで人間の怖さを感じる
	状況が明らかになるまで様子を見る
憎い相手の辛さや苦勞を感じる	
社会に戻れるように後押しして共に歩む	社会に戻れるように後押しする
	社会復帰を勧める
	社会に戻れるように一緒に歩む
事故を人生の節目だと前向きに捉える	様々なライフイベントを経験し、事故も節目だと捉える
	事故を前向きに捉える
生き残った者・家族としての思いと使命を受け止め、生かされているということに感謝して生きていく	生き残った者・家族の使命を受け止めて生きる
	生かされているということに感謝しながら生きる
	生と死は隣り合わせということを意識する
危機を乗り越えることで自分自身が成長し、家族も成長と再構築を繰り返し再出発する	事故からの経験を通して、自分自身の成長と変化に気づく
	家族が変化し成長する
	事故を自分の糧にして立ち上がり前に進む
	様々な危機を乗り越え、家族を再構築し本当の家族となり再出発する
	家族の絆を大切にする
	周囲のサポートを受け生活しながら乗り越える
周囲の人からの支援や頑張り刺激を受け前に進む	

とする経験であり、4つのサブテーマを含んでいた。

case Cは、主治医から覚悟をして欲しいと説明を受けていたが、「目の前で呼吸して生きている姿を見るとそんなことはないって、生きてるやんという思いが強くて、一度も死を考えた

ことがなかった。」と語り、入院後から厳しい状況が続いていた時は、負傷者である娘を抱きしめることで<生きている徴候を受け止め、生きる希望に変えて生きてい(く)>た。また、case Fでは、妻が入院したことで母親の役割も担うこととなり、「会社もずっと休んで、昼は

(病院に) おって、夜は子どもの面倒をみるために(家に) 帰ってきて。」と語り、各々の役割を調整し、<負傷者を含めた家族のためにできる限りのことを行い、自分たちの日々の生活を大事に(する)>し、<負傷者を守りながら生活(する)>していた。

3) 事故の記憶から距離を置くことで自分や家族を守る

【事故の記憶から距離を置くことで自分や家族を守る】とは、負傷者から無理に事故のことを聞きだそうとせず、負傷者の心身の準備性が整うまで待ち、個々の家族員もストレスから自分を守る方法を選択するという経験であり、2つのサブテーマを含んでいた。

case Eは、「あんまり本人が語らない限り、事故のことは言わない」と語り、家族のなかでも事故のことは話題にせず、本人が<話したいと思うまで待(つ)>ち、これまでと変わらない日常生活を心がけ、家族の時間を大切に過ごしていた。また、case Aでは、職場でも負傷者の家族として注目を浴び辛い立場に立たされることもあった。当時のことについて、「人前で涙をこぼしてしまったり、どんどん涙が出てきて。なんかそんな、けったいなことになってしもうて。」と語り、自分自身でも感情のコントロールできなくなっていることに気がつき、家族や専門家に相談しながらストレスから<自分を守る方法を選択(する)>し、事故のことは必要以上に話さないことで事故から距離を置き自分を守っていた。

4) 負傷者の身に起きた出来事を家族の出来事として共有する

【負傷者の身に起きた出来事を家族の出来事として共有する】とは、事故を負傷者だけの出来事ではなく家族におきた出来事として捉え、負傷者とともに心身の痛みと向き合うという経験であり、2つのサブテーマを含んでいた。

case Dは、娘の当時の様子について「痛みがひどい時は、家族は見ているだけじゃないですか、何とかしてあげられる訳じゃないし。それが一番辛い。本当にもう2人で抱き合って泣いてきましたね。」と語り、痛みと闘う娘の姿を見て母親として一緒に向き合い共有していこうと決心し、<逃れられない痛みに葛藤し、家族

として向き合う>なかで親子の絆が深まっていた。また、Case Fは、「時間が経つとやっぱりね、本人だけが残している痛みというのが、心の痛みもそうやし。」と語り、事故に関する情報を集めながら、<負傷者の身に起きた出来事を共有(する)>し、事故を家族の問題として捉え向き合ってきた。

5) 同じ境遇の仲間との関わりの中で共通点を探し、立ち上がるきっかけを掴む

【同じ境遇の仲間との関わりの中で共通点を探し、立ち上がるきっかけを掴む】とは、同じ事故に遭遇した人々と出会うなかで、自分や自分たち家族との共通点を探し、一人ではないという安心感と歩み出す勇気やきっかけを見つけるという経験であり、3つのサブテーマを含んでいた。

case Dは、事故の説明会に参加するまでは、誰にも相談することができず孤独を感じていた。しかし、説明会に参加し色々な人と話をするなかで、同じ想いの人がいることを知り家族として再出発することができていた。「被害者の方の支えというのは心の支えというのは、どれだけのパワーをもらうか。」と語り、<同じ状況の人の経験から、自己の経験の共通点を探(す)>し、立ち上がるきっかけを掴めたことで<巡り合いと出会いに感謝(する)>していた。

6) 家族会に参加し社会への活動として広げる

【家族会に参加し社会への活動として広げる】とは、事故後に家族会に参加し、事故を自分達家族だけの問題ではなく社会の問題として捉え、活動を展開していくなかで自分たちにとって必要な情報を選択していくという経験であり、4つのサブテーマを含んでいた。

case Dは、「家族会に参加したら沢山の方が来てらして、やっぱり情報が欲しいんだなあとその時に見て思ったんですよ。私もそうなんですよね。その中で自分はこうした方が良いんだなあというのが見えてくるじゃないですか。」と語り、家族会に参加し社会と繋がり<沢山の情報の中から自分にとっての答えを探(す)>し選択することで、少しずつ前に進み始めることができた。また、case Eでは、「(社会活動を)やればやるほど、しないといけないことや、今ある支援とない支援がどんどん見えてくるので。

今ある支援の使いまわしも大事だけれど先がないなど。じゃあ、ないものをどうやって作っていったら良いんだろうって。」と語り、事故直後から先のことを予測して行動（する）>し、<社会資源を活用し、社会と繋がっていく>ことで、社会のなかでの居場所を作っていた。

7) ストレスを抱えながら加害者企業との交渉や家族会の活動を行う

【ストレスを抱えながら加害者企業との交渉や家族会の活動を行う】とは、事故後から各々の生活や環境が変化し、様々なストレスを感じながらも加害者企業との示談交渉や家族会の活動を継続していくことで家族のなかでも徐々に互いを認め合えるようになったという経験であり、8つのサブテーマを含んでいた。

case Eは、負傷者を含めた自分の家族のことを中心に考え、家族会の活動が彼らの負担とならないように、家族会の活動と自分の家族は分けて考えていた。しかし、「家族の一員から、自分の子どもはほっておくって言われて結構気にしたり。反対に家族会の活動をしているから、大学の先生はお母さんが構い過ぎやっという話をしてきたり。」と語り、事故直後から支援活動を始めたことで役割が増え、家族の時間も十分にとることができず家族員や周囲に理解してもらえない辛さ>を味わい、また、社会からも負傷者家族として注目を浴びたことでく個々の家族員も二次被害を受け（る）>た。しかし、そのような状況でも諦めずに家族会の活動を続けく家族員に理解してもらえたことで孤独から解放され（る）>た。また、case Bでは、事故直後から加害者企業の方々が丁寧に対応してくれていたことが、安心につながり「その人らに怒ってもしかたないな。という気持ちはありますよね。原因が分からない状態でもしゃあないし。」と語り、感情的になるのではなく<状況が明らかになるまで様子を見（る）て>冷静に事故を受け止めようとしていた。

8) 社会に戻れるように後押しして共に歩む

【社会に戻れるように後押しして共に歩む】とは、負傷者の心身の状態が落ち着き、社会復帰ができる時期になると家族は負傷者とともに社会復帰の準備を始めるという経験であり、3つのサブテーマを含んでいた。

case Dは、「事故後に初めて電車に乗った時に、もう硬直しちゃってね。でも、『頑張る』って言って。『これ慣れないと学校に通えない』って言って。」と語り、娘が復学を希望した時に、その第一歩の勇気を支え前向きな気持ちを大事にしよう<社会に戻れるように一緒に歩（む）>み、できる限りの応援し共に歩んできた。また、case Aでは、事故前から就職も決まり職場も復帰を待っていており、「強引にいかんとしゃあないし、そんなん言うてられへんやん言うて。」と語り、<社会に戻れるように後押し（する）>し、父親として家族として共に再出発していく覚悟で歩んできた。

9) 事故を人生の節目だと前向きに捉える

【事故を人生の節目だと前向きに捉える】とは、事故後から様々なライフイベントを個人や家族としても経験し、今回の事故を振り返った時に、事故も人生のおける一つの節目だと捉えるようになったという経験であり、2つのサブテーマを含んでいた。

case Bは、親として娘が事故をどのように受け止めているか心配していた。しかし、「結婚式をやった時に、小さい時からのスライドがあるじゃないですか。その中に入院している時の写真が出てきて、あっすごい、思い出になってるのかなと思って。」と語り、娘が順調に回復し、その後も<様々なライフイベントを経験し、事故も節目だと捉える>ことができるようになっていたことに親としても安堵していた。また、Case Fでは、事故直後から親戚や友人、負傷した家族との出会いを通し事故に遭って嫌な思いもしたがそれ以上に得られたものもあったと、少しずつ<事故を前向きに捉える>ことができるようになった。

10) 生き残った者・家族としての思いと使命を受け止め、生かされているということに感謝して生きていく

【生き残った者・家族としての思いと使命を受け止め、生かされているということに感謝して生きていく】とは、家族の一員が甚大な事故に遭遇し、生還できたことで家族としても生き残った者の家族としての思いや使命を受け止めながら、今、生きていることに感謝して生きていくという経験であり、3つのサブテーマを含

んでいた。

case Cは、「この子が居てくれるから。ほんまに生きてくれて良かったなって、もうほんまに思うから。何言われても、もう全然どうもない。」と語り、そばで生きてくれている喜びと安心を実感すると同時に、<生き残った者・家族の使命を受け止めて(生きる)>、人との出会いや先祖の力を得て様々な危機的な状況乗り越え<生かされているということに感謝しながら(生きる)>、生き残った者・家族として何ができるのか人生の宿題を抱え、一日一日を大事にして生きている。

11) 危機を乗り越えることで自分自身が成長し、家族も成長と再構築を繰り返し再出発する

【危機を乗り越えることで自分自身が成長し、家族も成長と再構築を繰り返し再出発する】とは、家族は事故直後から喪失の危機や家族崩壊の危機を経験し、周囲の人々の支援や家族が本来もっている力を活用し危機や困難を乗り越え、家族を再構築していく過程で、自分自身や家族の成長を感じるという経験であり、7つのサブテーマを含んでいた。

case Eは、「今では凄くお互いを大事にしている。それまではいるだけで家族だったのかもしれないけど、お互いに支え合うということに目覚めて、質が変わったのかもしれない。それが有る意味PTG (Posttraumatic growth) なのかもしれないけど。」と語り、数々の試練を経験し<周囲の人からの支援や頑張りに刺激を受け前に進(む)>み、自分自身が変化し成長できたことで、家族のなかでも互いに支え合うということや家族の力を高めることができ、<家族が変化し成長(する)>してきた。また、case Bでは、事故直後から親戚の助けを受けながら家族の危機を乗り越えてきた。そして、示談交渉が始まってからは、娘のために最善の方法は何かと模索し家族会の活動に参加した。「そんな社会と繋がるのは自分から進んでやる方ではなかったから。(中略)自分も成長したかなと思う。」と語り、事故直後から先のことを見据えて行動し<周囲のサポートを受け生活しながら乗り越え(る)>てきたことで、<事故からの経験を通して、自分自身の成長と変化に気づ(く)>き、家族として再出発してきた。

V. 考 察

1. 大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族の経験の特徴

1) 負傷者を守りながら自分達の生活のバランスも調整する

事故直後の家族は、突然の出来事に戸惑い【状況が分からないなかでも、生きている・帰ってくると信じ(対応する)】、今できることを考え、対応しながら連絡を待ち続けていた。そして、安否が確認でき入院生活が始まってからは、【自分達の生活にも配慮しながら、家族が一丸となって危機を乗り越えようとする】。しかし、家族で団結して危機を乗り越えようとしても先の見えない不安や疲労が蓄積し家族が崩壊しそうになる時があり、その都度、家族のなかで軌道修正を行い、時には【事故の記憶から距離を置くことで自分や家族を守(る)】りながら、危機を乗り越えていることが考えられた。

危機的状況を経験した家族の生活の変化について平原(2005)は、「家族全体の関心が患者に集中するため他の家族員への関心や配慮が薄れがちになる」と述べ、本研究においても事故後は負傷者中心の生活に変化していた。また、伊波(2013)は、衝撃的な出来事に遭遇した直後の家族の体験として、自分の思いや考えを表出できず行動できない状態を体験すると述べているが、本研究では、事故の知らせを受けた直後の家族は<生きていると希望を抱き信じて祈り続け(る)>、突然の危機にも家族として必死に対応しており、危機的状況における家族の行動としては、家族や家族構成員の個別性が表れることが分かった。また、事故後は自分たちの生活を維持することも視野に入れ、各々が役割を調整し<負傷者を守りながら生活(する)>していた。このことについて関根(2012)は、「病者が生命の危険な状態から脱することができた時、より現実的な不安を高めながら「病者の状態に応じた家族生活の再構築」という大きな課題に取り組み始める」と述べ、家族は自分達の生活のバランスも調整しながら家族の再構築をしていると考える。

2) 仲間との関わりのなかで立ち上がるきっかけを掴み歩む

負傷者が事故や後遺症と向き合おうとする姿を目の当たりにし、家族としても【負傷者の身に起きた出来事を家族の出来事として共有（する）】していた。そして、家族としても前に進むためにきっかけを模索していた。そのような時に、【同じ境遇の仲間との関わりの中で共通点を探し、立ち上がるきっかけを掴む】ことができた。また、仲間と思いや経験を共有し解放することで、自分達家族が前に進むための準備を始め、自分達の居場所として【家族会に参加し社会への活動として広げ（る）】た。さらに、【ストレスを抱えながら加害者企業との交渉や家族会の活動を行（う）い】ながら、負傷者が【社会に戻れるように後押しして共に歩（む）み】、危機からの回復の過程を辿っていると考えられた。

受け入れがたい現実を前に、家族が新たな歩み始めるきっかけとして、飛行機事故で息子を亡くした美谷島（2013）は、「家族の支え合いも重要ではあるが、同じ経験を共有した者同士で思いや体験を分かち合うことも重要である」と述べている。また、大島（2007）は、家族が立ち上がるきっかけについて、「社会と繋がることと仲間との体験の共有が鍵になる」としている。つまり、事故後に家族で立ち上がり危機を乗り越え再出発していくためには、家族会という自分たちの居場所や集える場所が必要となる。

一方、立ち上がり歩み始めた後も先の見えない葛藤や将来への不安、加害者企業との示談交渉など様々な壁が家族の前に立ちはだかり、家族は<ストレスを抱えて生活をする>ようになり、再び家族に危機が生じる。実際に、交通事故外傷後に家族が抱える介護負担として、長島（2006）は、事故後の処理や他者との交渉に生じた精神的な負担を挙げ、家族も周囲の何気ない言葉や家族の中での何気ない言葉に傷つきストレスを抱えていることが考えられた。さらに、家族は負傷者の状態が落ち着いてくると負傷者が社会の一員として<社会に戻れるように後押しする>。しかし、災害や事故が負傷者の心身の健康に与える影響は大きく、事故や災害後に

は、「出来事の侵襲的想起」「事件に関するものに対する心理的苦痛・恐怖感」「過度の警戒心」といった精神的症状が残存すると報告されている（清水、2002）。このように、心身の回復には時間が必要であり、負傷者は試行錯誤を繰り返して自分達のペースで社会へと戻る準備を始め、家族は負傷者と自分達家族が再出発できるように、周囲の支援や自分たちの力を活用しながら負傷者とともに歩んでいると考える。

3) 時間の流れの中で自己や家族の変化に気づく

各々の生活が落ち着き日常を取り戻すなかで、家族は【事故を人生の節目だと前向きに捉え（る）】、【生き残った者・家族としての思いと使命を受け止め、生かされているということに感謝して生きてい（く）き】、社会や家族のなかでの役割を見つける。事故後からの家族の軌跡を振り返ると【危機を乗り越えることで自分自身が成長し、家族も成長と再構築を繰り返し再出発（する）】してきたと考えられた。

今回の事故は、家族に大きな衝撃と変化をもたらし、各々の家族員は生きる意味や家族の存在を振り返ることとなった。また、事故後も家族のなかで<様々なライフイベントを経験し、事故も節目だと捉える>ようになるまでには長い年月が必要だった。そして、負傷者の家族はこれだけの甚大な事故を経験し、自分の家族が無事であったことに感謝しながらも、<生き残った者・家族の使命を受け止めて生きる>ことが自分たちの役目だと考えるようになった。さらに、災害や事故に遭遇した人々のなかには生存者罪悪感を抱く人も多く、特に災害時高齢者医療の新たな課題として提起されている（飯島、2012）。今回の事故でも、同じ車両でも生死を分けたという悲惨な状況があり、負傷者の家族としても自分達にできることとして活動を続けているのではないかと。また、家族は事故を経験し様々な人と出会い危機を乗り越えていく度に学び、自らも変化し、さらに、この経験を自分たちの糧として前に進んできたと考えられる。

4) 負傷者から家族、家族会から社会へと視野が広がる

事故後の家族の視点や関心は、負傷者から家族、家族会から社会へと変化していることが示唆された。突然死で家族員を亡くした家族の心

理的变化に関して中道 (2007) は、時間の流れのなかで心に余裕が出てくることで遺された子供達にも関心が向き、さらに周囲の人への関心も出てくると述べている。本研究でも、家族は突然の事故により平穏な日常が奪われたことで衝撃を受け負傷者のことしか考えられなくなる。しかし、そこから自分たちの家族を守り日常を取り戻すために、家族の力と周囲からの支援を受けながら立ち上がり始め、自分達家族のことへと関心が向けられていた。そして、自分達家族もこのまま立ち止まってしまうといけないと考え、社会との繋がりを求め家族会へと関心が広がっていた。また、家族会での活動を通し自分達家族としての社会での役割と使命について考え始め、社会へ関心が向けられ、啓蒙活動や社会活動に繋がっていたと考える。

2. 災害看護実践への示唆

1) 事故後の家族のプロセスと心身の準備性に即したケア

看護師は負傷者の家族が事故後から辿る様々な危機や心理過程、出来事を理解し各々の時期に即したケアが必要である。また、家族の心身の準備性を考慮したケアとして、家族自らが事故や災害と向き合う心身の準備が整う時まで、いつでも支援できる距離を保ち見守ることも重要である。

2) 家族が孤立しないための支援

大規模交通事故などの人災では家族は直接の負傷者ではないため、社会からの支援や理解を得ることが難しく社会的容認が得られることが少なく、家族同士が集える場所がないこともさらに彼らを孤独にしてしまう。そのため、看護師は家族の孤軍奮闘を防ぐためにも家族がいつでも相談できる体制を整え社会的容認が得られるように支援し、家族がピアサポートを得ることができるよう支援していくことも重要である。

VI. 結 論

大規模交通事故の負傷者と共に生きる家族の経験として、以下の2点が明らかとなった。

1. 家族の経験の中にはプロセスが存在する

事故直後の負傷者の家族は、「衝撃」を受けつつも「希望」を抱きながら家族の安否を祈る。そして、入院生活が始まると自分達の生活も再構築しながら、家族が団結し危機を乗り越えようと奮闘する。また、負傷者と苦楽を共にする中で体験を共有し家族で事故と向き合い、仲間と情報を求め社会と繋がり立ち上がるきっかけを掴む。

2. 事故後、状況が落ち着いてくることで視野が広がる

負傷者の状態が落ち着き、生活の見通しが見えてくると家族の視野は負傷者から家族、家族会から社会へと変化していく。

V. 本研究の限界と今後の課題

研究の全過程において、適宜スーパーバイズを受け信頼性を高める努力をしたが研究者自身の主観的な見方が影響することは避け難かった。また、協力者に偏りが生じないように留意したが協力者全員が家族会を通じて紹介を受けたため限界があった。さらに協力者も6名であり負傷者の怪我の程度も異なっており、一般化するには限界がある。今後の課題としては、協力者を増やし家族会に参加していない家族などに広げていく必要がある。

謝 辞

本研究にご協力いただきました協力者の皆様、ご指導賜りました先生方に心より感謝を申し上げます。本研究において申告すべき利益相反事項はない。

<引用・参考文献>

安藤清志・松井豊・福岡欣治 (2010). 航空事故犠牲者遺族の心理 —名古屋空港中華航空機墜落事故の事例から(1). 東洋大学社会学部紀要, 48 (2), 57-72.

平原直子・瓜生浩子 (2005). アプローチ論 生命危機状態の患者家を抱える家族に対する家族関係調整の方略. 野嶋佐由美, 渡辺裕子. 家族看護 生命の危機状態にある患者の家族

- への看護, 24. 東京: 日本看護協会出版会.
- 飯島勝矢 (2012). 災害時高齢者診療の今後の課題. 日本老年医学会雑誌, 49(2), 164-169.
- 伊波久美子・片岡秋子・門間正子 (2013). 突然死に遭遇した家族の救急外来での体験. 砂川市立病院医学雑誌, 26(1), 140-144.
- 石原邦雄 (編) (2008). 6 家族ストレス論の形成. 家族のストレスとサポート. 改訂版. 放送大学教育振興会. 97-114.
- J R 福知山線脱線事故被害者有志 (2007). あの日を忘れない J R 福知山線脱線事故 2005年4月25日の記憶, 神戸: 神戸新聞総合出版センター.
- 国土交通省 (2011). 航空事故調査報告書および日本航空123便の御巢鷹山墜落事故に係る航空事故調査報告書についての解説.
- 国土交通省 (2013) 公共交通事業者による被害者等支援計画作成ガイドライン, <http://www.mlit.go.jp/common/000992945.pdf> (閲覧日: 2016年6月10日)
- 前田正治・比嘉美弥 (2006). 輸送災害と外傷性ストレス反応—船舶・航空・鉄道事故に関する研究総説. トラウマティック・ストレス, 4(1), 49-59.
- 美谷島邦子 (2013). 御巢鷹山と生きる, 東京: 新潮社.
- 長島緑 (2006). 在宅で交通事故外傷の高次脳機能障害者を10年以上支援してきた家族の介護負担. 日本看護学会誌, 16(1), 120-136.
- 中道昭好・池田京子 (2007). 妹の突然死を体験した兄の悲嘆過程. 武蔵野大学看護学. 部紀要, (1), 47-57.
- 大島尚子・村岡宏子 (2007). がんで妻を失った男性遺族の死別後における心理的状态と遺族会参加の意義. 東邦大学看護研究会誌, (4), 1-10.
- 清水綾子, 大溪俊幸, 石松伸一 (2002). 地下鉄サリン事件の被害者における精神症状. 臨床精神医学, 31(5), 549-561.
- 関根光枝 (2012). 方法論 ポストクリティカル期における家族へのケア. 野嶋佐由美, 渡辺裕子. 家族看護 クリティカルケア領域での家族看護(10), 56. 東京: 日本看護協会出版会.
- 内海千種・宮井宏之・加藤寛 (2008). 大規模交通災害被害者の健康被害 第Ⅱ報—被害後2年半における調査協力者の現状—. 心的トラウマ研究, 4, 37-48.
- 運輸安全委員会 (2015). 運輸安全委員会年報